



本例は重系7才の牝馬で、妊娠末期に胸前から下腹部にかけて浮腫が現われ、分娩後そのまま硬くなり且つ増大の傾向を示した。それから2年後、左上頸部にも小腫瘤が出現し、次第に大きくなって7ヵ月後にはラクビーボール大となったため本学家畜病院を訪れたが、予後不良と診断され屠殺した材料である。

殺後の肉眼所見では胸前部、左上頸部の皮下は、皮下織から骨格筋の一部を含めて厚さを増して灰白色の鞏固な腫瘤を形成し、刀割を加えると結合組織の増殖が強くその中に石灰沈着を伴った粟粒大の小結節病巣が密発していた。また、肺は左右とも粟粒大の球状の結節病巣が密発するとともに、灰白色のやや透明感を有する不規則な眼局巣を形成して、一部ではそれらが融合して粗大病巣として認められた。肺のほか、小腸および結腸の粘膜下織、リンパ節、肝にも結節病巣が散発ないし多発していた。

肺病巣の組織所見では、多数の限界明瞭な結節病巣とともに巨細胞を含む組織球性の細胞を主とする巣状の肺炎病巣として認められ、何れも比較的強い好酸球の浸潤を伴っていた。前者では類上皮細胞、巨細胞に囲まれた

顆粒状の石灰沈着巣を中心に核に乏しい厚い膠原繊維層が圍繞し (Fig. 1, $\times 36$)、やや新しいものでは中心部に核破片と多数の類上皮細胞や巨細胞の参加があり、それらは好酸球やリンパ球の浸潤を伴った疎な結合組織によって取り囲まれている。また、巣状の肺炎病巣では結節形成の傾向を示す小病巣の散在とともに肺胞内に多数の剝離上皮、巨細胞、滲出液を満たし、肺胞壁は厚くなって好酸球、リンパ球、形質細胞の強い浸潤、さらに所によって繊維母細胞の増殖が認められる (Fig. 2, $\times 40$)。肺以外の皮下の腫瘤をはじめ、小腸および結腸、リンパ節ならびに肝に見られた結節病巣も性質的に肺病変と類同のものであった。

当初、われわれは、これらの形態学的変化から寄生性肉芽腫性肺炎と診断した。しかし、肺病巣およびその他の臓器の病変部について数多くの連続切片を作製し、種々の特殊染色を施して検索したにもかかわらず菌体、寄生虫あるいはその卵、またその残骸を思わせるものを認めることが出来なかった。従って提出標本については一応原因を表わす修飾語を省いて、単に肉芽腫性肺炎と診断した。